

# 国語

## 〈注意〉

- 一 「始め」の合図あいずがあるまで、中を開けないで、注意事項をよく読んでください。
- 二 解答用紙は中に折り込まれています。最初に受験番号と氏名を解答用紙の指定欄らんに記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の指定欄に記入してください。
- 四 字は濃こく、はっきりと丁寧ていねいに書いてください。
- 五 字数には、句読点くとうてんも記号も一字として数えます。
- 六 鉛筆えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム以外は使用できません。
- 七 問題冊子さつしは16ページまであります。
- 八 開始・終了は監督かんとくの先生の合図あいずに従したがってください。
- 九 早く解とき終わっても教室の外には出られません。
- 十 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。



一、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。なお、文中の言葉の下の「」の中はその言葉の意味とする。

真面目まじめがすぎるくらいの、真面目な両親。特に母親、とスミちゃんが言う。

子どもにこうなつてほしい、というのも、何も自分の見栄みえというわけではなく、真面目さの表れだったように思う、と。

「真面目な人つて、義務が得意なんだよね」

「義務？」

「うん。すべきことを与えられるとそれは一生懸命、とにかくこなすことを考える。無駄むだがない質素しっそな生活を心がけて、清く正しく生きることが得意。その逆で、苦手きやくなのが娯楽ごらくや贅沢ぜいたく。何かを楽しむつてことがすごく苦手」

それだけなら特に悪いことではない。むしろ、私たちが普段学校で教えているような道徳的な価値観だろう。

しかし、スミちゃんの家の場合きやくたんはちよつと極端きやくたんだった。

「たとえば、母は着るものや食にそんなに興味がなくて。自分がそうだから、きつと子どもの私もそれで構わないと思つたんだろうね。だからこそ、私はお菓子がほとんど禁止だつたんだろうし、洋服も母の知り合いのところからもらつたおさがりが多くて、ケツ②コウな年になつても、買うことはもちろん自分で選ばせてもらつたこといっさいも一切いっさいなかつた」

お菓子は、家に遊びに来る友達はに対しては恥ずかしいことも多かつた、という。普段、友達の家に行くと、ビスケットやチョコレートを出してもらつているのに、うちでは何も用意できない。勇気を出して母親に頼むと、「おじいちゃんにもらつた干し柿ほがあるでしよ」と言われた。

「——虫歯になるから食べさせたくない。お菓子をほしがるような子になつたら困るつて言われたんだけど、それがもうなんていうか、強迫観念きようはくかんねん「いくら打ち消しても消えない不安な気持ち」の域いきなんだよね。子どものためにつて本人も真剣まけんに思つてるんだけど、

母が真面目教っていう宗教みたいなものに入って、その教義に付き合わされてる気分だった。そんな時、よくこう思ったんだ。いっつそ、この人が継母（まはは）「育ての親」だったらいいのになって」

昔を思い出すように、スミちゃんがまたため息をついた。

「よく、言うことを聞かない子どもに対して『お前は橋の下から拾（ひろ）ってきた子だ』って言って脅（おど）かす——みたいな話を聞くでしょ？  
うちは両親からそんなことを言われたことはなかったけど、本当に継母だったらいいのになって思ってた。どこかに本物の優（やさ）しい、子どもの話もちゃんと聞いてくれるような母親がいて、今の母が継母だったならいいのになって思うのにな、残念ながら顔がそっくりだからそれもないわけ。友達から、スミちゃんとお母さん、同じ顔だねって言われるたびに、傷ついたなあ」

彼女の家は、父親も母親もスミちゃんと同じ教師だ。生まれ故郷のS町という町の近くで、ともに小学校の先生をしていた。共働きで、経済的に不自由していたということもなく、だからこそ理不尽（りふじん）さ「道理に合わないこと」は募（つ）った。お母さんのことを「真面目教」だと思えなくなった。

「たとえばね、家族旅行に行くとするじゃない？ それもね、なんか義務なんだよ。修学旅行や研修旅行みたいに、夏のその時期だから、一度は行事としてやらなきゃいけないっていう、ただそういうものだからって感じ。旅行先は国内の車で行ける範囲のところが多かったんだけど、ホテルについてまず、母が言うのね」

——すぐ近くにスーパーが見えたから、よかった。これでご飯が困らないわね。

「どうということ？」

真剣にわからなくて私が言うと、スミちゃんが苦笑（くしやう）した。そして答える。

「言ったでしょ？ 母は食に興味がないから、食事を楽しむって考えがそもそももないの。それは旅行先でも同じ。私たちが修学旅行

で子どもたちにご飯を食べさせる場所を確保しなきゃって行程を練る③ように、食事も義務なの。ご飯は食べられればそれでいいし、一番困るのは食べられる場所が見つからないこと。旅行先でも、スーパーでお弁当やお惣菜を買ってきて、部屋で食べるのよ」

( ④ ) する。なんのための旅行なのか——と思っていると、スミちゃんがまた微笑んだ。

「真面目に家族旅行をしちゃうの。楽しむための旅行じゃなくて、旅行のための旅行。他にも、せっかく旅に来てても、うちの周辺にあるのと同じファミレスに入っちゃったりする。——まあ、子どもの頃だからファミレスは好きだったし、うちは普段はなかなかそういうところにも行かない家だったからその時はそれで嬉しかったんだけどね。とにかくそんなふうには、うちは楽しむことへのこだわりがすごく薄い家だったの」

真面目ってすごいよ、とスミちゃんが言う。

⑥ 「楽しむことが悪っていうのは、すごく損。ファミレスで、食べたごはんがおいしかった時に、母たちにも食べさせたいと思って、『一口食べる?』って聞いたたら、顔をしかめて『食べきれないなら残せばいいじゃない』って言われる。——娘が、おいしいものを親と分け合ったら楽しいって思う気持ちが一切理解できないんだよね。それと同じで、学校から地域のクラシックコンサートなんかのお誘いが配られた時にも、クラシック、私は退屈だけど、母は聴いてたことあったし、好きかもって思って、『お母さん、行く?』って聞いたことがあったんだけど」

行ってもいいよ、とお母さんは答えたと言う。

「行きたいわ、でも、行こう、でもなく、『行ってもいいよ』。楽しいことであつても全部、義務っぽいなだね。義務なら仕方ないから、楽しみに行ってもいい」っていうそういう感じ。だから、こつちも自然と誘う気が失せるし、母とはどんどん会話ができなくなっていく」

スミちゃんのお父さんはおとなしい人で、お母さんのように子どもに考えを押しつけることはなかったそうだが、同じように真面目で、お母さんの決めたことに従ってしまう。とはいえ、娘と二人だけで出かけた時にはスミちゃんにこっそりアイスを買ってくれたり、飲んでいた缶コーヒ<sup>かん</sup>ーを分けてくれたりして、スミちゃんはお父さんにはよく懐<sup>なつ</sup>いていた。

そんな「義務」の一つだった家族旅行も、スミちゃんが成長するにつれだんだんと様子が変わってきたそう。ただし、スミちゃんが、親と旅行という年でなくなっても、両親は家族旅行の「義務」を放棄<sup>ほうき</sup>しなかった。

家族なんだから一年に一度は旅行する。スミちゃんにはうんざり思えることもあったが、そういうものか、と付き合っていた。しかし、高校三年、受験生の年。夏の旅行を決めたから——と告げられ、お母さんに言われるがまましたくをしていると、部屋にやってきたお母さんが急にスミちゃんにこう言った。

——ねえ、あなた、受験の年に旅行なんてしていいの？

そんなことを言われても、誘<sup>さそ</sup>ってきたのは当のお母さんなのに。スミちゃんが（⑦）していると、その時は、たまたま話を聞いていたお父さんがかばってくれた。

——お前が旅行に行こうって決めたのになんでそんなことを言うんだ、この子がそれで行かないと言いだしたらどうするんだ。

スミちゃんはあまりにも腹が立ったので、言い合う両親を残して部屋を出た。すると、お母さんが金切声<sup>きんせつ</sup>でこう叫<sup>さけ</sup>ぶのが聞こえた。——だって、勉強してる様子がないんだもの。受験に成功してる子たちはもっと勉強してると思うのに。

私の母は自分の不安をそのまま子どもにぶつけてしまう人なんだ——と、そう思った。

受験生の年、早く寝た日は「受験生の寝る時間じゃない」と叱<sup>しか</sup>られて起こされ、遅<sup>おそ</sup>くまで起きていると「いつまで起きてるの。明日の授業は大丈夫<sup>だいじょうぶ</sup>なの」と叫<sup>さけ</sup>ばれる。矛盾<sup>むじげん</sup>したルールはお母さんの中にしか正解がなかった。

しかし、その時もお母さんはこう言うことをやめはしない。すべてはあなたのためを思って言っているのだ、と。

「今考えると、お母さんって、その家のルールそのものなんだよね」

スミちゃんが深く息を吐いて言った。

⑩「お母さんがどんな考えなのかっていうのが、その家のあり方を決める。それはきつとどの家でもそう。だから、その母親が世間知らずだったり真面目教だったりしても、その家ではその法律で生きてるから、それが当たり前になっちゃう。しかも、言葉だけだと『真面目』は清く正しい、推奨すいしょうされる考え方だから、そのことをどうおかしいのか、子どもの頃の私じゃ説明することもできなかった」

それでも心の中ではお母さんに対する反発は強まるばかりだったと言う。しかし、親は親、子どもは子どもという感覚の強い住吉家すみやけには、親を間違っていると云える雰囲気ふんいきはない。

お母さんのルールでがんじがらめになっているこの家から出たい。自宅から離れた大学に進学するしかない、と思った。

スミちゃんの両親は、スミちゃんがいずれ自分たちと同じ道を歩くに違いないと信じて疑うたがっていないかった。実際、親子何代にもわたって教師の家というのは多い。スミちゃんの親も、娘は地元大学の教育学部に進学するものと思っていたようだったが、スミちゃんはそのよりも難むずかしいと言われる、他県の国立大学の教育学部を受け、合格した。——私たちが今住んで、教師をしているこの土地だ。

どうして地元じゃダメなんだ、とこれはお母さんだけではなくお父さんからも言われたそうだけれど、難関校なんかんこうに合格したということで高校の先生たちもシユクフクしてくれ、両親もそうされるとまんざらでもなかったようで、スミちゃんが家を出ることを許してくれた。

「でもまあ、そうやって一人暮らしをすることも許してくれたし、学費も出してきて、そのうえ生活費の仕送りだってしてくれた。いい親なんだよ。感謝してるし、少しくらいのことを不満に思う私の方が恩知らずなんだと思う。だからあんまり、人に母への不満についても話したことなかった」

その「少しくらいのこと」は、たとえば、スミちゃんの一人暮らしに際し、お母さんがスミちゃんに何の相談もなく、家具や家電を一式、無断でリサイクルショップでそろえてしまったり、入学式に際してスミちゃんがおこづかいで買ったスーツのスカートに浅くスリット「きれこみ」が入っていることを、「そんなひねた「はしたない」スーツ困る」と怒ったり——ということだったそうだ。

スミちゃんが、このスーツは私が好みで選んだもので、むしろこのデザインがいいと思った——ということ話を話すと、翌日、お母さんはスーツのスリットを裏側から縫って、なくしてしまった。驚くスミちゃんにお母さんは笑顔で、「これなら着られるね」とほつとした様子だったという。お前の選んだこのデザインと色で、スリットもない状態でちゃんと着られるよ。あのスリット、邪魔だったもんね——と。

スミちゃんは、入学式でスリットがなくなった状態のスーツを着た。当日の写真を、お母さんが親戚に「このスーツ、なんかスリットが入ってたんだけどね、私が縫い付けたの。ね、そのほうがいいでしょ？」と自慢げに話していた。

衝突するたび、スミちゃんはいつも「私はいままでお母さんの娘でいればいいのって思ってた」と言う。<sup>13</sup>しかし、大学に進学してしばらく、スミちゃんはようやくやく手に入れた自由を楽しんだ。

お母さんがそろえた家具は色合いがちぐはぐだったり、ファミリー向けのせいでやたら大きかったりしたけれど、「だって大学の間使うだけなんだし」と安いことだけは安かった。この時もお母さんは、娘の一人暮らしを整える、という「義務」を忠実にこなしたのだ。

スミちゃんはそれらの家具を、自分のバイト代などでだんだんと取り替え、部屋を自分らしくしていった。とても楽しかった、という。

「あとは、生まれた故郷を離れたことで、母が生きている世界が実は狭かったんだろなってこともわかつちやっただよね。親だから偉いと思わされてたし、支配されてきたけど、それって母の偏った常識や思い込みに過ぎなかったんだなって」  
そんなふうのスミちゃんの生活が少し変わり始めた大学二年生の時、お母さんから一本の電話がかかってきた。

(辻村深月「噛みあわない会話と、ある過去について」より 一部表記・体裁を改めた)

問一、( ④ )・( ⑦ )には同じ言葉が入ります。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感激    イ 絶望    ウ 納得    エ 絶句

問二、——⑤「旅行のための旅行」とありますが、旅行する理由にあたる部分を、「から」に続くように文中から二十七字で探して、最初の五字を答えなさい。

問三、——⑥「楽しむことが悪つていうのは、すごく損」とありますが、この言葉でスミちゃんが言いたいこととして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが親を重荷おもにに感じるということ    イ 子どもの気持ちが親から離れていくということ  
ウ 子どもが自立できなくなるということ    エ 子どもが自己主張しなくなるということ

問四、——⑨「矛盾したルールはお母さんの中にしか正解がなかった」とありますが、お母さんにとっての「正解」の基準にあたる部分を、「とということ」に続くように文中から十九字で探して、最初の五字を答えなさい。

問五、——⑩「お母さんがどんな考えなのかっていうのが、その家のあり方を決める。それはきつとどの家でもそう。だから、その母親が世間知らずだったり真面目教だったりしても、その家ではその法律で生きてるから、それが当たり前になっちゃう」とありますが、お母さんの考え方を現在のスミちゃんはどのようなものと評価していますか。これよりあとの文中から十字で抜き出して答えなさい。

問六、——⑫「母への不満」とありますが、どのようなことが不満なのですか。「こと」に続くように文中から二十一字で探して、最初の八字を答えなさい。

問七、——⑬「ようやく手に入れた自由」とありますが、どのような「自由」ですか。これを説明した次の文の空欄にあてはまる同じ言葉を考えて五字以内で答えなさい。

□で□のことを決められるということ。

問八、スミちゃんの母親と父親の違いがわかる連続する二文を文中から抜き出し、一文目の最初の五字を答えなさい。

問九、スミちゃんがママとは違う「母親」に求めていることを「こと」に続くように文中から十六字で探して、最初の五字を答えなさい。

問十、本文の特徴の説明としてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会話と会話の間にテンポのよい説明や描写を重ねることで、重いテーマを軽快に、ときにコミカルに描いている
- イ 登場人物の人柄や思いを直接描き出さず、情景や行動の細かい描写によって読者にわかりやすく伝えようとしている
- ウ スミちゃんとわたしの会話だけを通して、本文に直接登場しないスミちゃんの母親の人柄を具体的に描いている
- エ スミちゃんが進める話にわたしが時々挟む感想や質問が重要な鍵となり、次第に核心に迫っていく展開になっている

オ 真面目な母親のことと、その束縛そくばくから解放されたいと願ねがい続けたことを、大人になったスミちゃんすみちゃんの視点から描えがいている  
問十一、——②「ケッコウ」・⑩「シユクフク」のカタカナを漢字に直し、——①「苦手」・③「練る」・⑧「金切声」の漢字の読み  
を答えなさい。

二、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。なお、文中の言葉の下の「 」の中はその言葉の意味とする。

みなさんも人に話しているサイチュウに、<sup>①</sup>「ああ、そういえば」と何かを思いついたことがありますか？ 「そういえば、こんなことがあってね」と思いつくことは、非常に大切なことです。なぜなら、それがアイデアを生み出すきっかけになるからです。クリエイティブな「創造的な」会話においては、「ああ、そういえば」ということが頻繁ひんぱんに起きます。相手の言ったちよつとした一言が刺激しげきになって、自分の経験の中から関連する事柄ことばらが、脳から飛び出すようになってくる。<sup>②</sup>それが新しいアイデアになったりします。あるいは普通の会話であれば、変化のある会話になります。つまり同じことの繰り返しではなく、会話が上手じょうずにずれていくという感じでしょうか。ずれるという言葉は、一般的いっぱんてきには話題がずれるという意味で使うことが多いのですが、ここでは「方向性がうまく変わる」という意味で使いたいと思います。

上手な会話の基本は、まず聞くことで、その上で会話に変化を付けていくことだと私は考えています。ですからここではまず、少  
しずつ<sup>③</sup>「ずらす」<sup>わざ</sup>技を基本にしたいと思っています。

「ずらす」技について、もう少し説明しましょう。相手が話しているとき、そこには相手の話したい文脈があります。自分がそれとは異なる話ことをしたいとき、つまり相手の文脈ぶんみやくに沿したがわないとき、「つていうか」という言葉で、全然違う話題ていだいに強引きやういんに持って行ってしままうことがあります。

これは「ずらす」ではありません。このように文脈をばつさり断ち切られると、相手は非常に不愉快になります。相手がいい気持ちじゃべっている時に、「話は変わりますけど」とか「全然違うことを聞いていいですか？」と言われれば、誰でもムツとします。そういう言葉は使わずに、自然に「ああ、なるほど。そうですね」と言いながら、すうっと違う話に持っていくのが、「ずらす」技の初歩です。

ここで、<sup>⑤</sup>聞くことと話すことの関係<sup>てんかん</sup>を転換させる面白い仕掛け<sup>しか</sup>をご紹介します<sup>しょうかい</sup>。これは<sup>⑥</sup>「ずらす」技<sup>じ</sup>に応用<sup>おうえん</sup>できる仕掛け<sup>しか</sup>にもなります。

みなさんは、「聞く」ということを、どう定義しますか？

普通、聞くというのは、耳から入った話を脳が情報として受け取ることだと思えます。しかし、私は「聞いた」という基準をもつと違うところにおいています。私の「聞いた」という基準は、その話を要約してポイントを落とさずにもう一度再生して、繰り返し話せるということ。つまり、再生できるかどうか「聞いた」ことの証明になります。この基準はかなり高いハードルです。

私の授業では、私が一時間くらい話してから、突然「それではここまで私が話した内容を、ポイントを落とさずに、二分でまとめて話してください」と言います。するとたいいていの人は「そんな話、聞いてなかった。そんなことを急に言われても困る」という反応を見せます。「それならメモを取っておけばよかった」と口々に言います。

二割の人は、私が何も言わなくても、最初から一生懸命メモを取っていますが、残り八割は「ああ、話しているなあ」という感じでボーツと見ていた人たちです。この八割が、「話が違う」とあわてるわけです。

八割の人たちも、話を聞いていなかったわけではありません。むしろ主観的には、一生懸命聞いているつもりだったと思います。私もそれほど難しい話をしてしているわけではないので、聞いているときには、全部わかったつもりになっていたでしょう。ところが、

いざインプットした「聞いた」内容を正確にアウトプットして「話して」くださいと言われると、これが全くできない。「話が違う」ということになるわけです。

同じようなことは日常生活でも見られます。たとえばみなさんが、パソコンの操作そうきの仕方を教えてもらったとします。この順序でこうして動かして、とインストラクター「指導者」から説明されているときは、何となくわかった気になります。「わかりました。どうもありがとうございます」と言っ、いざ自分で操作しようとしたとき、嘘うそのように手順を忘れていて、頭がまっ白⑦になった経験はありませんか？

もし、説明をされているときにメモをしておけば、そのメモを見ながらも一度再生することができます。ですから、話された内容をもう一度自分が成り代わって話すときに、一番必要なことはメモ力ということになります。メモする習慣が一番大切なのです。なぜわかったつもりになっても、パソコンの操作が再現できないのかというと、インストラクターの説明の中に抜ぬけているところがあるからです。インストラクターはパソコンの扱あつかいに慣れた経験ほうふ豊富な人たちですから、当然のようにキーを押おしていきま。たとえば電源を入れる行為こういなど、まさかそれを知らない人がいるとは思ってもいないので、説明の中に入れてません。このように説明されない動作がいくつもあるのです。しかし、聞いているほうはそれらもメモしておかないと、自分でできるようにはなりません。

それはたとえば、料理の講習会に行っても同じです。料理には下ごしらえなど段取りがあつて、料理をやったことのある人だったらわかる内容なので、講習会ではわざわざそこまでジツエン⑧してみせません。ところが、聞いているほうはそこまでメモをしておかないと、料理は再現できない。だから、いろいろ補完しながらメモを取っていかないと、正確には再生できないのです。

「人の話はわかったつもりになっても、もう一度再生しろと言われたら、再生できないことがほとんどである」このことを忘れ

てはいけません。聞いただけでは、自分の身になっていない、吸収できていないということです。しかし実際は、私たちが話を聞くとき、ほとんどは聞いただけの状態です。ですから私の授業では、初日に「私の話を二分で再現してください」というカダイ<sup>⑨</sup>を与えるのです。

これが私の考えた「再生方式」というやり方です。私はこの再生方式を、あらゆる授業で徹底<sup>てつてい</sup>すべきだと考えています。たとえば、理科で万有引力<sup>ばんゆういんりよく</sup>の法則について先生が説明したら、それをもう一度生徒に言わせませす。説明できればわかったということになります。明治維新<sup>いしん</sup>はなぜ成功したのか、先生が二十分くらいで話したとします。その内容を三、四分で要約して話せれば、それがわかったということ。二人一組で交互<sup>こうご</sup>に話せば、無駄なく全員ができます。でも、そういう授業方式をとっている学校はほとんどありません。学生たち何千人に聞いても、そういう授業を受けた人はいませんでした。とてもシンプル「簡単」で効果的なやり方なのに、実践<sup>じっせん</sup>しているところがない！ というのが驚<sup>おどろ</sup>きです。

聞いただけでは記憶<sup>きおく</sup>は定着<sup>ていしやく</sup>しません。しかしそれを再生すれば、記憶に残るようになります。つまり話すことによって定着<sup>ていしやく</sup>するのです。だから同じ話を二、三人に向かって続けざまに話すと、話は完全に定着<sup>ていしやく</sup>します。言ってみれば、古典落語のようなものです。何度も話しているうちにうまくなる。

テレビを見ている、時々、自分の経験や人生ドラマをおもしろおかしく、上手に話す人がいます。その人の不遇<sup>ふぐう</sup>「世間に認められない」時代やそこからどう立ち直ったかという話など、ネタは同じですが、以前聞いたことがあってもある程度<sup>おもしろ</sup>面白い。観客がいることによって、その反応を見ながら、受けるところ、受けないところを選別しているのです。ストーリーとしてなかなか面白いものができ上がるのです。

お笑い芸人で、トークの名手といわれる島田紳助<sup>しまだしんすけ</sup>さんや明石家<sup>あかしや</sup>さんなどは、仲間内でもどんだん話をしています。話して話

して、その中で受けたものだけをテレビの前で話しているのです。だから面白い。話せば話すほど、ある意味うまくなっていくって、記憶も定着していく。同じ話を何回もするというのは、記憶法としては非常に良いやり方です。

私はこの再生方式による記憶定着術を、自分が中学生のときから実践していました。たとえば、社会科の教科書を友だちと二人で交互に一ページずつ読み合います。一ページ読んだら、それを聞いていた方が教科書を伏せて説明をします。読んだ方は教科書を見ながら、抜けているところや用語を指摘してきしていくわけです。

すると再生して話すことで、記憶が定着していきます。このやり方で一番大切なのは、「次に自分が話すのだ」と思っただけで聞くことです。話すことを前提ぜんていに聞くと、吸収力が何倍にもなります。だから聞く時の態度がとても大切です。聞き上手とは、それを再生しろと言われたらできる人のことなのです。

話は再生するのだと思っただけで聞かなければ、身にはなりません。ただうなずいて「もつともです」と言っているだけの人は、もしかしたらそれが再生できないのかもしれないかもしれません。特に新入社員にありがちですが、上司が一生懸命に話しているのにメモも取らずに「はあ、はあ」とだけ言っている。そして上司から「ちゃんとわかってる？ もう一回言ってみて」と言われたら、お手上げになってしまいます。

つまり普通に聞いている状態は、ほとんど聞いていない状態と同じである、と気付くところから、私の授業はスタートします。話すことを前提に聞く。そしてメモをとる。

メモをとる際、私の授業では三色ボールペンを使います。ない人にはわざわざ買ってきてもらう。一日目は我慢がまんをしますが、二日目には全員に用意してもらって、三色で書き分けてもらうのです。非常に大切なところは赤で、まあまあ大事なところは青で、自分で考えたり、思いついたりしたことは緑でメモします。実はこの緑が非常に大切です。私の話によって触発しよくはつされて「ヒントを

与えられて」思いついたことや、これを質問したいということ、自分はこう思うといった考えを、緑でどんどん書き入れていきます。すると私の場合は、ノートが半分くらい緑になっています。

普通、メモといえば相手の話を記録することだと思いがちですが、それでは聞き上手、話し上手になれません。緑の部分がうまく書けることが重要です。その中から一番いいものを、相手に質問したり、意見を述べたりする。それが質問力、コメント力になるわけです。たまたま思いついたことだけを、場当たりの「その場限り」に質問したり、コメントしたりすると、当たり前外れ<sup>⑪</sup>があります。しかし、たくさんメモをした中から厳選して選ぶと、精鋭部隊の質問やコメントになるので、非常に質の高いものが出せるのです。相手の話と自分の話を上手に絡めていく、というのが聞くとき、話すときの技術です。つまり、相手の話と自分の経験してきた世界を常に繋げて、相手の話を自分の経験にくぐらせて聞いたり、話したりすることが、話し上手、聞き上手になるための王道かと思えます。そのために、的確な質問やコメントを練り出そうと思ったら、メモは必須<sup>ひつす</sup>というわけです。

(齋藤孝「話し上手 聞き上手」より 一部表記・体裁を改めた)

問一、——② 「それ」の具体的な指示内容を、「経験」「関連」という言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問二、——③ 『「ずらす」』の意味を「ずれる」の意味と対比させて考えて、文中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

問三、——⑤ 「聞くことと話すことの関係を転換させる面白い仕掛け」とありますが、

- 1 「聞くことと話すことの関係を転換させる」の意味を「仕掛け」に即して説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

聞いたことを  話すこと。

- 2 「転換させる」ために必要なことを文中から六字で抜き出して答えなさい。

問四、——⑥『「ずらす」技に応用できる」とありますが、これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、結論の部分から七字で抜き出して答えなさい。

この「仕掛け」に必要な作業をすることで質の高い [ ] を用意して話せるようになるということ。

問五、——⑦「頭がまっ白になった」とありますが、

1 ここでの意味を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を考えて五字以内で答えなさい。  
説明されたのに何も [ ] ということ。

2 パソコンの操作の上でそのようになる理由を、「から」に続くように文中から十五字で探して、最初の五字を答えなさい。

問六、——⑩「定着する」とありますが、これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉をそれぞれ文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

ア [ ] になり、イ [ ] できたということ。

問七、筆者が考える理想的な話し方を述べている連続する二文を探して、一文目の最初の五字を答えなさい。

問八、本文を次の小見出しの四つの内容的なまとまりに分けたとき、四つ目のまとまりが始まる最初の五字を答えなさい。

一つ目 会話を「ずらす」技術

二つ目 筆者が考えた「再生方式」

三つ目 再生方式による記憶定着術

四つ目 有効なメモのとり方

問九、——①「サイチュウ」・⑧「ジツエン」・⑨「カダイ」のカタカナを漢字に直し、——④「浴わない」・⑩「外れ」の漢字の読みを答えなさい。

